

臨春閣

修理工事の記録 歴史を受けつぐ

今回の工事のメインは経年劣化で傷んでいた檜皮葺屋根・柿葺屋根の葺替。
 檜皮葺は檜の皮(=檜皮)を、柿葺は薄く割った木の板(=柿板)を少しずつ
 ずらして並べ屋根を形作り、竹釘や金釘で打ち止める技法です。今やユネスコ
 無形文化遺産にも登録された世界が認める日本の匠の技です。

※修理の記録映像は、三溪記念館内ロビーでご覧いただけます。

竹くぎの打ち方

-
- ①口に含んだ竹くぎを、尖っている方を内側にし一本ずつ口から出します。
 - ②口から出したくぎを、かなづちの柄と一緒に握りこみ、柄の途中の金具を使って押し込みます。
 - ③押し込んだ竹くぎを、かなづちの上の部分で「トントン」と叩いて打ち付けます。



腕を揮った職人さんの中には20代の若者や女性の姿も。伝統技術を受け継ぐ彼らの研鑽の場としても、今回の工事は重要な意味を持っています。

第三屋2階 檜皮葺屋根(上層)・柿葺屋根(庇)

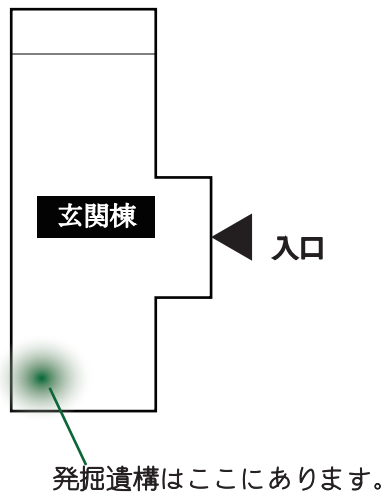


柿葺屋根施工の様子

足かけ5年もの歳月をかけ行われた臨春閣の保存修理事業ですが、文化財建造物の保存修理事業は「変えずに遺していくこと」が求められるため、工事前後で大きな変化は見られません。修理工事で行われたこと、修理工事で発見されたものをご紹介します。

玄関棟で戦前の遺構を発見！

臨春閣玄関棟は昭和の戦災で倒壊したため、戦後復旧修理時に新たに建てられたことが記録として判明していました。そのため戦前のものは遺されていないと考えられていましたが、今回の大修理事業で耐震壁浮き上がり防止用重石を地下に設けるにあたって地下の掘削を行ったところ、戦前の床=四半敷きが遺されていることが確認されたのです。昭和の修理でも歴史を尊重して遺し伝える事を工夫していたという事が分かりました。発見された遺構は玄関棟内部でご覧いただけます。



今回工事における耐震壁設置工事の方策

現在の壁(木摺壁) 弱い壁 vs 耐震壁(構造用合板) 強い壁

耐震壁にする壁(工事前:木摺壁)

重石設置用掘削箇所(四半敷き遺構検出)

地震の力

強い力に耐えきれず壊れてしまうかも

頑丈なので壊れない ※表面の見た目はあまり変わりませんが、ここでは分りやすくするための色を変えています。

壁は壊れないが、力に負けて壁ごと浮き上がってしまう可能性がある

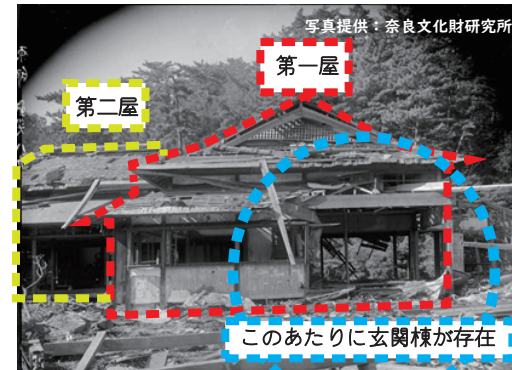
地下に鉄筋コンクリートの重石を設け、重石と壁をつなぎ、浮き上がりを防ぐ

戦前の様子



戦前の写真から、かつて床面は四半敷きであったことが分かっていました。四半敷きとは、石敷き・瓦敷きで、目地が縁に対して45度になるように斜めに敷いたもののことです。写真からは素材や色は分かりませんでした。写真からは素材や色は分かりませんでした。発掘の結果スレートであることがわかりました。

戦後すぐの様子



昭和20年の空襲により三溪園内は大きな被害を蒙り、滅失・焼失してしまった建物もあります。臨春閣の第一屋・第二屋・第三屋は半壊に留まり修理が行われましたが、玄関棟は完全に破壊され失われてしまったため、新しく建てられました。